

音楽の授業における発問の機能

- 「赤とんぼ」の授業を例にして -

弘前大学教育学部 吉田 孝

はじめに

音楽の授業における教師の教授行為は、二つに分類することができる。音楽的行為及び言語行為である。

音楽的行為には、範唱、範奏、指揮、伴奏、合図などがある。これらの音楽的行為は学習者の音楽表現に影響を及ぼす。

言語行為は、一般的には指示（「　　しなさい」、「　　しましょう」）、発問（「　　ですか」）、説明（「　　です」）の三種類に分類されることが多い。しかし、このような分類は表面的な分類にすぎない。

例えば、授業の中で教師が「この曲は何分の何拍子ですか」と問うことがある。わかった時は挙手するというルールが教室にある場合、この問いには「わかった人は手を挙げなさい」という指示が隠されている。

一方、「この曲をどのくらいの速さで歌ったらよいかを考えなさい」と指示する場合もある。この指示には「この曲をどのくらいの速さで歌ったらよいと思いますか」という問いが隠されている。

こう考えると、教師の言語行為を、語尾の違いによって指示と発問に区別することにはあまり意味はない。むしろ、学習者の音楽活動や学習活動に、その言語行為がどのような機能すべきかを検討するほうが重要である。

山住正己は明治時代の師範学校の学生のノートを紹介している（句読点、表記はママ）。

『小学唱歌集』初編 第29曲<雨露>

（全体的な注意）歌詞のかいしゃくはあまり文字上の事にわたらなひで生徒がまへから読本とか歴史等にてきゝしところをおもひださせてそれを問答的に其事実を知らしめ然るのち教師はじめて全体のかいしゃくをごくていねいねつしんに為すことを要す師 甚だよし もはや階名にてうたう事はじくしましたから之より進んでうたをつけましよ然し其まへに汝等に問ふ事があります

師 此えを知るものあるか

（集生挙手す）

師 指名す

生 仁徳天皇のえで天皇が民のかまどのけむりを御らんになる。

師 然り汝等は読本又は歴史のときにおきゝになりましたらうどなたか仁徳天皇の御慈悲深くあらせられたる談話を簡単に話すことの出来るものありや

生 談話す

（山住正己『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会、1967）

この記録を読むと、既にこの当時から授業は教師が一方向的に説明したりするのではなく問答形式ですすめていくことが良いとされていたことがわかる。しかし、この例の中で教師によって発せられる問いは、学習者にとってはただ「既知の知識を話せ」という指示あるいは命令に過ぎず、自らの頭に新たな問いを生み出すものではない。

私は、語尾が指示型になっているか質問型になっているかどうかにかかわらず、発問を次のように定義する。

発問とは学習者の頭の中に問いを発生させるような教師の言語行為である。

本稿では、発問が学習者の思考を促し学習者の表現にも影響を与えている事例を紹介する。事例は、2003年12月4日に東京都立小松川高校の第1学年の生徒に対し私自身が行った授業「赤とんぼ」である。

1. 「赤とんぼ」へのこだわり

私は「赤とんぼ」(三木露風作詞)の歌詞に二十年ほどこだわり続けてきた。特に第三連である。

十五で姐やは嫁に行き お里の便りも絶え果てた

この歌詞の状況がどうしても理解できなかった。普通は、次のように解釈する。

解釈1 話者(作品の中の私)の家に奉公に来ていた少女(話者の子守役)が、十五になって嫁いで行った。その姐やがしばらくは話者の家(または話者)に便りを送ってきたが、その便りも途絶えてしまった。

しかし、次のような疑問がわいてくる。

疑問1 ではどうして里(普通は実家という意味)の便りなのか。姐やは嫁いだのだから里からの便りというのはおかしいではないか。

それで、次のように「里」という概念を広く捉えてみた。

解釈2 「里」は実家というより故郷という意味である。姐やは自分の故郷にあるどこかの家に嫁いだのだ。そこからの便りをお里の便りと呼んでも矛盾しない。

この解釈は20年ほど前にある論文に書いた(千成、八木、吉田「音楽科の授業構成に関する一試論」『教授学の探求3』北海道大学教育学部、1985)。しかし、どうもすっきりしない。次のような疑問をおさえることができないからである。

疑問2 故郷ならどうしてどうしてわざわざ「お里の便りも」とお里を強調するのか(この詩の中で「お里」という語はかなり強い印象を与える)。

一方、さまざまな俗説があることも知った。例えばある大学生は中学校の授業で次のように教えられたそうである。

解釈3 お里とは姐やの名前である。

確かにつじつまは合う。お里という名前の少女がいてもおかしくはない。しかし、次の疑問に答えることができず、不自然である。

疑問3 どうしてここだけ「お里」という固有名詞が出てくるのか。なぜ最初は「姐や」なのか。

また、次のような説もあるらしい。

解釈4 里とは話者の実家である。話者は何らかの理由によって実家を出されていたのである（露風が7歳の時に母と別れたことと結びついているらしい）。そのため話者の実家にいる姐やが話者に便りをしてくれていたが、姐やが嫁に行ったためその便りも途絶えてしまった。

一応つじつまは合う。しかし次のような疑問は残る。

疑問4 実家から出されたというのは特別な状況である。それならばそれを暗示するような記述がその前になければならない。一般の読者が共感できないような状況である。また十五になる前の少女が、家を出た子どもに手紙を出すというのも不自然である。

釈然としないものはあったが、とりあえず解釈2を自分の考えとして説明した。しかしあまり説得力がない。それで、いろいろな人の意見を求めたり、パソコン通信などで意見も聞きながら、次のような解釈にたどりついた。

解釈5 里は姐やの嫁ぎ先ではなく、姐やの実家である。姐やは話者の家に奉公しに来ていて、その家から嫁に行ったのである。嫁に行ったあとも、姐やの実家が世話になった話者の実家に近況を知らせても不思議ではない。それが途絶えてしまったのだ。その理由はわからない。姐やか姐やの実家に不幸があったのかも知れないし、途絶えるほど時間が過ぎたということだけかも知れない。

ほぼこれで私は間違いのないと思った。現在でも間違いのないと思っている。

この追究の過程は非常におもしろかった。そうすると今度はこれをネタにして授業を試みたくなった。

2 発問づくり

この「赤とんぼ」の歌詞を素材にして、ここ7～8年の間に大学生を相手に何度か授業を試してみた。しかし、一部の学生は興味を持ってくれるのだが、授業が今一つ盛り上がらない。激論で教室が騒然となるような授業を試みたいのだがうまく行かない。

理由ははっきりしている。問いがまずいのである（私の定義で言えば発問になっていな

いのである)。例えば、次のようにたずねても、大学生でさえ考えてはくれない。

この歌詞で不思議なところはありませんか。

はじめから考える気のない学生は、自分自身で疑問など見つけることもできないのである。次もまずい問い方である。

どうして、お里から便りが来ていたのでしょうか。

「来ていたから来ていたのだ。それは作者に聞けばよいことである」くらいの答えしか出てこないのである。結局私自身が追究してきた過程を説明することになる。少しは関心をもってくれるがそれで終わりである。自分自身の頭を使わないので何も残らない。教師である私にはむなしさだけが残る。

向山洋一氏はまずい「発問」として「ムダ・ムリ・ムラの多い発問」をあげ、次のように述べている。

授業の時、わかりきったあたり前のことを聞く人がいる。
時に一つか二つ助走のために問う時はある。しかし、わかりきったことを延々と聞く。
国語の授業に多い。
あたり前の一つの言葉を、ちがうあたりまえの言葉に置き換えているのである。
退屈な授業である。
一問一答という形での授業となる。
全くムダである。
ムリな発問とは子どもが答えられない発問である。
(中略)
何を聞きたいのかさっぱりわからないのである。
発問は短く端的に言い切れることが必要になる。
語尾が不明確なものも答えようがない。
「日本の米づくりどうかしら」などと聞かれても答えようがない。
「問題点を挙げてください」ならわかる。
(向山洋一『発問一つで始まる「指名なし討論」』明治図書、2003)

学習者に考えさせるにはこの逆をやればよいのである。

2003年5月に学部の「教職入門」というオムニバス授業(1回のみ)で「教材研究入門」と題して、大学生に授業をした。その時には学生もかなり考えてはくれた。ただこの授業にはやや思いつきの部分があった。他のところでうまく行かないところがあった。それでいつかきちんとした形でこの授業を実施したいと考えていたところ、小松川高校教諭の島田沙苗氏から出前授業の依頼があったので、そこで実施することにした。

まず明確に答えようのある発問を考えた。その結果次の3つの発問が浮かび上がった。

発問 「お里」の意味は？
実家 故郷 その他の中から答えを選びなさい。
発問 「お里」とは誰のお里か？
発問 誰から誰への便りか？

さらに次の発問を加えた。

発問 の答えのつじつまが合うように状況説明しなさい。

この4つの発問を中心発問として授業を構成した。50分授業2時間で授業を実施することにした。

3 授業の構成

次のような流れの授業を考えた。

- (1) CDで「赤とんぼ」を4回流す。この間に生徒に歌詞を書き取らせる。
4名を指名して板書させる。それぞれに四つの連の一つを担当させる。
- (2) 歌詞の聴き間違い、漢字の間違いを指摘させる。
- (3) 「話者」という概念について説明する。
- (4) 予備の発問をする。
 - ・話者は今何をしているか？
 - ・負われて何を見たか？
 - ・誰に負われたか？
 - ・なぜ「幻」なのか？
- (5) 中心発問をする。
10分間で考えノートするように指示する。
発問 を縦軸に発問 を横軸にしたマトリックスをつくり板書していく。
それぞれの考え方について発表させる。
- (6) 姐やはどうなったかを推測させ発表させる
- (7) まとめのプリントを配り読む。
全員で「赤とんぼ」を歌う。

以下はそれぞれの場面で計画した発問である（『』は教師の発言であり、重要な発言は枠囲みにしている）。

(1)

『今からある曲のCDを4回かけます。その間に歌詞を書き取ってください。できるだけ漢字を使いましょう』

「赤とんぼ」をCDで4回かける。

全員が書けたことを確認する。

4名を指名して一連ごとに分担して板書させる。

他の生徒には次のように指示する。

『ゆっくり読んで、意味のわからないところ、不思議だなあと思うところに線を引いてください』

(2)

4名の板書を見て次のように言う。

『4人が書いたのと違うところがある人は手を挙げてください』

一つひとつ指摘させる。書いた生徒を納得させた上で板書の文字を訂正する。

予想される間違いとそれに対する対策は次のとおりである。

・「追われて」 『誰が誰に追われたか』『この歌は赤とんぼの気持ちを歌ったのか』

・「姉や」 『本当の姉のことを「ねえや」と呼ぶだろうか。「ばあや」とはどういう人ですか』

『わからない言葉、疑問に思ったことがある人は手をあげてください』

指名し板書する。

(3)

次のような説明をし板書する。(波線は板書・実際には縦書き)

『今からこの歌詞について考えていきますが、一つ言葉の約束をしましょう』

話者 = 作品の中の私

作品の中の私のことを「話者」と言います。

話者というのは作者そのもの場合もありますが作者とは違う場合もあります。例えば「モーニング娘。」の今のヒット曲は？ この詩の作者は誰ですか？ ではこの詩はつくが自分の気持ちを書いたものですか？ 違いますね。また夏目漱石の「坊っちゃん」を読んだことがありますか？

「坊ちゃん」の話者は主人公の坊っちゃんですが、それが夏目漱石とは限りませんね。漱石はあんな乱暴者はなかったようです。

ここでは、話者と作者は区別して考えましょう。

(4)

この場面では次のような発問をする。

1) 話者は今(今というのも作品の中の今です)何をしていますか。

2) 「負われて見た」とありますが、何を見たのでしょうか。

3) 誰に負われたのでしょうか。歌詞全体から推測しましょう。

4) 何故「幻か」なのでしょうか。

(5)

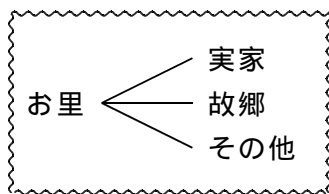
まず次のように説明して板書する。

『お里という言葉が出てきました。お里という言葉は普通は実家という意味です。少し

広く解釈して「田舎」「故郷」という意味もあります。その他にもあるかも知れません。私は思いつきませんが』

さらに『では次のことを考えてください』と言って次のような発問をし板書する。

この場合、「お里」の意味は？
誰の「お里」か？
便りは誰が誰に出したか？
つじつまがあうように状況説明できるようにしましょう。



お里の意味
誰の
誰が誰に
状況説明

『では時間は10分です、ノートに書いてください。ノートに書いたことを説明してもらいます』

10分たったら、作業をやめさせる。

について挙手させて黒板に分布を書く
それぞれの分布ごとに について説明させる。
吉田の考えも話す。

実家 姐や 姐やの実家 話者の実家 嫁に行ったあとしばらくは姐やの実家から姐やの近況について知らせる便りが来ていた。しかし、そのうち何の便りも来なくなってしまった。

(6)

次のような発問をする。

『推測でけっこうです。姐やはどうなったのでしょうか』

自由に意見を言わせる。

(7)

次のようなプリントを配り一人を指名して読ませる。準備したプリントの内容は次の通りである。

赤とんぼと三木露風

「赤とんぼ」は1921(大正10)年に発行された三木露風の童謡集「真珠島」の中に収められています。この三木露風の詩に山田耕筰が1926(大正15)年に曲をつけました。

三木露風(本名 操)は1888(明治21)年、兵庫県龍野町(現龍野市)で生まれました。

祖父（制）は龍野町長、九十四銀行の頭取などを勤めたほどの人でした。ところが父（節次郎）はだらしない生活をしていました。祖父が見かねて母（かた）が自由にできるようにと離婚させました。それで母は家を出ていきました。露風が7歳の時のことです。

姐やのことは記録が残っていません。母が出ていく前から奉公に来ていたのか、母が出ていったから姐やが奉公に来たのかもわかりません。ただ、三木露風自身は後に「赤とんぼ」は姐やのことを歌った歌だと述べています。その後、音信不通になったことも事実のようです。ですから、この詩が三木露風の体験をもとに作られたことはまちがいありません。

ただし、詩がすべて事実にもとづくものとする必要もありません。授業の中で説明したように、作者と話者は必ずしも一致しません。

例えば、「実際に露風を背負ったのは母か姐やか」ということをいくら詮索してもこの詩を味わうことにはなりません。実際には姐やも背負ったし、母も背負ったのでしょう。しかし、この作品の中では姐やが背負ったと考えるほうが自然です。また、姐やが嫁に行ったのも本当は十五でなく十六、十七の時かもしれません。しかしそうすると語呂が悪くなりますね。作品では十五の時に嫁に行ったのだと考えることにしましょう。それで作品の価値が下がるということはありません。歌の歌詞を味わう時に大切なことは、事実がどうだったかということよりも、その作品の中ではどうだったかと考えることです。

最後に全員で「赤とんぼ」を斉唱する。

4 授業の実施

12月4日の3・4時限目に、東京都立小松川高校の第一学年の生徒39名を対象に授業を実施した。

私の全体的な感触から言えば、生徒は頭をふりしぼって考えた。また非常に議論が盛り上がった。参観者からもそのような感想があった。生徒の授業に対する感想にもそれが表れている。

授業の流れ

(1)～(3)はほぼ計画通りに授業がすすんだ。

「負われて」は最初「壊れて」と板書されたが、生徒の指摘で「追われて」「負われて」と訂正されて言った。「姐や」も最初は「姉や」だったが生徒から訂正された。

(4)でも前半1)～4)は計画取りに進行した。

(5)の中心発問も計画通りに進行した。

『10分間考えてください。まわりの人と話し合ってください』と指示した。

最初はひそひそ話だった。しかしだんだん教室が騒然となっていく。特に男子の間で活発な議論が生まれた。

10分立ったところで休み時間になり、10分間の休憩時間をとったが、休み時間になっても議論している生徒が見られた。

授業再開後は、まず に関しては挙手によって分布をとりながら、黒板（ホワイト

ボード)に次のようなマトリックスを作成していった。全部でa～oの17種類の組合せができた。

	姐や 話者	姐や実 姐や	姐や 話者実家	話者 姐や	話者 姐や	話者実家 姐や	話者実家 話者
姐やの実家	8 a	7 g					
姐やの故郷	1 b	1 h	1 i				
姐やの嫁ぎ先	8 c		1 j				
話者の実家	2 d		2 k	1 l		1 n	3 o
話者の故郷	1 e				1 m		
姐や自身	1 f						

数字は人数 a, b は の組合せの種類

このマトリックスにもとづく状況説明は次のようなものであった。

- a) 姐はまず自分の実家に帰ってから嫁いたのである。実家にいる時は便りも書けたが、嫁いだので書けなくなったのである。
- b) 解釈2と同じ(「オー」という声あがる)
- c) 嫁ぎ先もお里と言える。その嫁ぎ先からの便りが絶えてしまったのだ。
- d) 解釈4と同じ(「オー」という声あがる)
- e) 説明なし
- f) 話者にとって姐やは「里」そのものである。
- g) 姐やが話者の家にいる時は姐やの親から便りがきていたが、嫁いだので来なかった。
- h) 説明なし 以下略

生徒に意見の聞いたあと、吉田の考えとして解釈5を話した。

(6)については4名を指名した。「姐やは亡くなった」「不幸になった(2名)」「幸せにくらしている」という答えがあった。

最後に「赤とんぼ」を全員で歌った。しっかりした声で歌っていた。参観にきていた高校の先生によると「授業の中でためてきた思いを一気に表出するような」歌い方だった。

おわりに

文末に、授業についての生徒全員の感想を添付している。この授業での生徒の様子とその感想から、この授業での発問の機能を次のようにまとめることができる。

1) 発問の力によって学習者は思考を促されている。

参観者の一人は「生徒が考えざるを得ないように追い込んでいくような授業だった」と述べた。

2) 発問は音楽作品に対する見方を変える。

私自身は、ほとんど自分の意見を最後に言うだけでほとんど何も教えていない。しかし次のような感想を持った生徒は多い。

「『赤とんぼ』の歌の話でこんなに深いところまでいくなんですごかったです。僕は途中で訳がわからなくなってしまったけどちゃんと考えられたので良かったです」

生徒が考えざるを得なくなった理由は次の通りである。

1) 教材そのものつまり「赤とんぼ」という作品に力がある。

2) 発問 のように短く答えられるような発問をつくりだした。それを確定させてを考えさせるようにしたので、考えざるを得なくなった。

私たちは、日常の授業ではついついムリ、ムダ、ムラの多い発問をしてしまう。発問にもう少し気を使うべきだ。印刷物や視覚教材づくりに過大な労力を注ぐより（学習者が考えなくてすむようにするだけだ）、学習者を思考せざるを得ないところに追い込む発問づくりに労力を注ぐべきだ。

最後にこのような機会をつくって下さいました東京都立小松川高校の天沼照夫校長先生をはじめ諸先生方、音楽科担当の島田沙苗先生及び生徒の皆さんに厚くお礼申し上げます。

参考資料 生徒の感想（誤字等は訂正して記載した）

赤とんぼの歌がこんなに切ないとは思いませんでした。大学の授業がこんなにおもしろいとは。高校でもこういう授業がしたいと思った。

歌の詩の意味を考えることはなかったが、考えてみると、色々な考えが出てきて面白かった。赤とんぼは短い歌だが、多くの見方があるなと思った。

今までの授業でやった事のない内容で、とても新鮮でした。赤とんぼのような童謡の歌詞の解釈は難しいけれどとても楽しめました。すごく勉強になりました。

国語の読解みたいでおもしろかった。音楽を奏でる、歌うということ以外のことをしたので意外だった。

いつもの授業だと、歌うことばかりしていたのだが、このような「考える授業」もいいと思う。ただ、もう少し歌いたい気持ちもあった。まあ、おもしろかったです。

赤とんぼの詩について中の中まで状況を想像するのがとてもおもしろかった。あまり普段歌について想像とかしないけれど……。想像することによって歌う気持ちとかもかわってくると実感した。これからは他の曲も話者の気持ちとか想像してうたいたいです。

最初は歌詞を書いてどうするの？って思いました。それからその歌詞の内容を考えていたけれど本当に色々な考え方があってなんだなあと思いました。このようなことをやるのは初めてちょっと難しかったけど楽しかったです。

「赤とんぼ」の歌詞を全然知らなかったし、歌詞の意味も知らなかったので勉強になっ

た。

吉田先生の授業がおもしろいです。思ったより時間がはやかったような気がした。普通の短い詩をここまで分析したりしたのは初めてだけどわかりやすく楽しかった。

このような授業は初めてだった。詩を読解するのはおもしろい。

大学で行っている授業と聞いたので、「どんな事をやるのだろうか？」とか「どれだけ難しいのか？」とか思っていました。受けてみると自分が考えていたような、固苦しいものではなく、とても興味がわく楽しい授業でした。途中、考えるのが面倒！って思う所がありました。そんな事があってこそ、自分の意見と他人の意見を味わえることができました。詳細はわからないけど、これだけ短い詩で色々なとても中身の濃い授業内容だと思いました！！

今までの音楽の授業といたら、歌ったり楽器を使ったりすることばかりだったけれど、今日の授業のように自分で歌の歌詞について考えたりするのはとても新鮮で面白かった。

「赤とんぼ」の詩だけで色々な意見が出てくるんだなと驚きました。単純な詩だからこそ、考えがふくらんでとてもおもしろかったです。

いつもとは違う授業内容だったので新鮮でした。吉田先生の例えがとてもわかりやすかったです。そして楽しかった。時間が短いように感じました。ピアノとても上手でした。吉田先生の授業が受けられてよかったです。

聞き慣れ親しんでいる童謡の訳詞の意味や状況について今までこんなに深く考えたりしたことがなかったので、今回詞についていろいろ考え、他者の意見を聞いてまたそれについて考えたりできて楽しかったです。

今までにやったことのないタイプの授業でとても新鮮でおもしろかったです。国語の授業も入っていたような気がするけど（笑）

この授業でいろいろな人のたくさんの意見がきけてなるほどと思った。自分の考えもすこし変わった。

昔の歌って単純な詞だけど、全く違う意味を示していたり話者の気持ちや状況が表現されていると改めて感じました。だからこそ歌詞を読みとるのが難しいのだと思います。

普段、何気なく聞いていた曲にも、深く考えると色々な意味や場面が見えてきておもしろかった。他の曲の深い意味を知りたいと思った（明治、大正、昭和中期くらいに作られた曲など）。歌ったり楽器を使うのもおもしろいけど一つの曲について考えるのもおもしろいなあと思った。

一人一人それぞれ意見がちがっている所以他の人の意見をきくことも自分でいろいろと考えることも勉強になるんだと思った。大学ではもっとむずかしいことをやると思ったけどかたくるしくなくて楽しかった。自分が持ってた大学のイメージとちがった。

昔の童謡とかの詩を深く考えていくと、ほとんどの歌が悲しい詩になっていて切ない。

いつもの授業と違って良かった。一曲に対する思い入れがすごいと思った。音楽の深さを今日は身体で実感した気がした。こういう授業は結構好きです。

大学の授業でやっていることをやるって最初に言われたのでどんな凄いものをやるんだろう、と思っていたので「赤とんぼ」だったのでびっくりしました。こういう授業は初めてだったので新鮮でした。

昔から歌ったり、知っている曲だけど、歌詞の内容は深く考えた事がなかった。私はこの詞で話者は少しさみしい気持ちなんじゃないかと思った。だから最後にみんなで歌った時は、少しさみしいイメージで歌っているような感じだった。昔から私は赤トンボは“夕ぐれ”のイメージだったけど、吉田先生の授業でかなりイメージが変わったと思う。

島田先生から“来週は吉田先生が教えてくれます”と言われた時、おもしろい音楽を聴いたり歌ったりするのかと思ったけど、まさか歌詞の内容に触れるとは思わなかった。国語の授業みたいと最初は思ったけど、その歌詞の意味を知っていると知らないのでは、歌い方も変わるんだなあと思った。

自分は文章を読みとるのが苦手なので今日の授業は難しかった。

歌の歌詞をここまで分析したのは初めてで、何がなんだかわからなかった。吉田先生の「歌の歌詞を味わう時に大切なことは、事実がどうよりも、作品の中ではどうと考えること」という言葉になるほどなあと思った。

とてもおもしろい授業でした。このやり方で他の歌もやってみたいです。ありがとうございました。

今まで何気なく聴いている歌にもここまで着目して考えてみるとまた違った新鮮さがあった。おもしろかった。

一つの歌にこんなに面白い物語があったのがわかって面白かった。

大学の授業は考えさせられるものだとわかりました。考えることもけっこうおもしろいものでした。しかし、はっきりした正解がないのにはちょっともの足りなさを感じました。

「赤とんぼ」は中学校で習いましたが、こういう授業をやることで色々な人の解釈もきけてそい風にも考えられるなあと思いました。自分で文章を書こうと思った時はやっぱり自分のことも交えて書いたりするのが多いなあと思いました。音楽だけではなくて、国語も学んでいるみたいでした。

歌詞の意味を深く知れた。わかりやすかった。楽しかった。

今日の授業をうけて赤とんぼの歌詞にここまで深い意味があるということを知ったのでとてもためになって良かった。

赤とんぼの歌の話でこんなに深いところまでいくなってすごいと思いました。僕は途中で訳がわからなくなってきてしまったけど、ちゃんと考えられたので良かったです。とても良い授業になったと思います。

1つの歌にもこんな深いテーマが隠されているんだなあと思った。考えるのは大変だったけど楽しかった。授業はなかなかスムーズで良かった。

とても面白かった。みんな様々な意見を持っていて「なるほどなあ」と思われることも多かった。最初と赤とんぼに対する印象がすごく変わった。

音楽の授業というよりも国語の授業という感じがして新鮮でした。「赤とんぼ」はどちらかというと簡単な歌という印象を持っていたので、奥が深い事を知って驚きました。

国語力が必要だと思った。合唱祭の練習をしたかった。